

# 聞名仁教

第109号  
(発行日)

2019年10月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始  
(8月は休みます)
- 〈念仏座談会〉8月は休み  
毎月12日午後3時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月6日午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)  
毎月18日午後6時30分始

# お釈迦様の選択

ほぼ二五〇〇年前、インドでお釈迦様(釈尊)が二十九歳で出家される前に思案された内容が、お悟りを開かれた後の釈尊の説法の中に残っています。それによりますと、

「人間が生きていると言うことは煎じ詰めれば何かを求めること。その求めに善い求めと悪い求めがある。

悪い求めとは、生まれるものであつて生まれるものを求め、老いゆくものを求め、滅ぶべき身であつて滅ぶべきものを求めること、憂いに沈むもの、汚れに染むものである。生まれるものは妻子、召使い、家畜、金銀などである。これらのものは滅ぶべきものであり、憂いしずむものである。自分が老いゆくもの、病むもの、死ぬるもの、憂いしずむもの、汚れに染む

ものでありながら、それらの煩いを見て、老いず病まず死なず汚れない、この上ないやすらかな涅槃を求めることである」と仰せられています。

私たちは日々、あるいは一瞬一瞬、何かを選んできました。毎日が選択の連続です。日々ですと、何を為し、何を食べ、何を着、何処で買い、何に乗りなど日々選択の連続です。人生の節目ですと、どの学校に行くか、何を職業にするか、誰と結婚するか、何処に住むか、などがあります。そういう選択の連続ですが、その選択に善し悪しがついてまわります。

釈尊は若き日、「私はこの人生に於いて要するに何を求めればいいのか」という根本的な選択の問題にぶつかりました。こういう問

いを持つことは、本当は誰にも課せられている問いです。ただこういう問いが課せられていながら、それをして問題にせず、ただ世間一般の考えやその時代の常識にしたがつて選んできたというのが普通です。しかし釈尊は「私はこの人生に一体何を求めれば充実し、安らぎに至り、浄らかであり、人びとの幸せに寄与することができるか」というような根本的な問題を自覚的に問題とされたのでした。

選択の連続がその人その人の人生ですから、現在の私の状況は私が今まで選択してきた結果であるといつても過言ではありません。私の人生を形成してきた一

## 《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日(日) 午後二時始

講師 山口県防府市

宮田 秀成先生

\*なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

番の責任者は誰のせいでも無い、そのつど選んで行爲してきた私自身です。

もちろん、人生上には病気にかかったり天災地変や交通事故に遭つたりという(不運)なり偶然とでもいうべき事柄もいろいろ身に降りかかってきます。しかし、そういうさまさまな出来事に対して、それらをどう受け取り、どう対処し、どう意味づけをするかということは自分自身の責任であり、事柄そのものよりもより大切なことは、それらをどう判断し、どう決めるかという選択に、正否・善悪・良し悪しが問われています。

さて、釈尊は若き日に「私は私の全人生に結局何を求

めたら善いのか」に悩み、そして一筋に真理を求め、道を選んでいかれました。八十歳で涅槃に入られる時に弟子のスバッタに対して「スバッタよ。わたしは二十九歳で、何かしら善を求めて出家した。スバッタよ。わたしは出家してから五十年余となった。正理と法の領域のみを歩んできた」と仰せられています。

釈尊の場合の選びとは、「老いるもの、病むもの、滅ぶもの、汚れに染むもの」を求めず、「老いず、病まず、滅びず、浄らかなもの」を選ばれたのです。それが後に仏道といわれる道だったのです。滅ぶものとは我が身体だけでなく、財産や持ち物、そして家族や友人関係などで、それらはいっかは離れていくものです。ところが世間は「滅ぶもの、老い、病となり、死に、汚れるもの」をのみ求め、そうして憂いに沈んでいく、と釈尊は考えられたのです。釈尊は王家に生まれ、非常に恵まれた環境に育ちましたが、そういう良き環

境も我が身も、みな離れていき滅んでいくものであると考えられたのです。

そこで不死・不老・不病なる真実を求めんがために、二十九歳の時お城を出て、修行者の群れに身を投じ、六年の間厳しい修行をされて、遂に悟りを開き、不死のいのちを得られました。生まれて老いて病となり死んでいく肉体的な我が身から解放され、死なないいのちを自己として発見されたのです。

この〈自己〉はもはや自分の計らいや力で保持し、守り、蓄える必要の無いのちです。誰にも邪魔されず、だれにも奪われず、誰にも襲われず、一瞬一瞬いつでもどこでも常に与えられているのちです。ですから、守り保持しようとして執着する必要はありません。むさぼる必要もなく、それゆえ人と争うこともありません。汚れない、浄らかな生き方が釈尊にはおのずからできたのであります。

このように釈尊は善きも

のを選ばれ、そうしてそれを得て大いなる安らぎ（涅槃）に達せられました。

逆に、世の苦しんでいる人たちは悪いものを選んで善いものを選ばないから、いつまでも「憂い」や「不安」につきままとわれていると仰せられるのです。それゆえ、私たちに真実なる善きものを選べと教えておられるのです。

こういう選びについては釈尊だけではありません。イエスキリストの説教にも同じ趣旨のことが言われています。聖書（マタイ伝）に

「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。あなたの富のあるところに、あなたの富のあるのだ」と言っています。「あなたの富のあるところに、あなたの心もある」とは意味深

長ですね。私たちはどこに私の心の抛り所、人生の依りどころすなわち〈富〉をおいているのか、そこがいつも問われています。

その人にとって〈富〉のあるところに、その人の心の抛り処がありますから、何を富にするか、どこに富を置くかが問われます。

釈尊は厳しい修行によって滅びない自己を発見されました。では私たちも同じく厳しい修行をしなくてはならないかというと、釈尊はそういう難行によって覚る道だけを説かれたのではなく、釈尊は悟られありません。釈尊は悟られた後に、一切衆生を平等に救いたもうアミダ仏（はかりないのちであり、光である）を感得され、アミダ仏の救いを浄土の教法として説かれました。それがお念仏の法です。お念仏を称え、お念仏を聞くところにアミダ仏とのあいが与えられるのです。お念仏を称え、お念仏のお心をひたすら聞くことによつて、人は有り難いことに死んでからではない、今ここで不生不

滅のアミダ仏に遇わせていただけるのです。（了）

### 【講演会のお知らせ】

十二月十八日（水）

午後二時始

難波別院御堂会館にて

（地下鉄「本町」下車）

スイス人で若い頃仏教に触れ、日本に来て真宗大谷派の僧侶になられた山口ジョーシ師（四十歳）の講演があります。講題は「なぜ私は真宗を選んだか」です。

講演の後ミニコンサートがあります。参加自由で、無料です。

### 〈遠方法話予定〉

○十月五日。福井別院。午前。法話・座談。

○十一月九日。福井別院。午前。法話・座談。

○十一月十三日。名古屋市。高畑会館。午前。法話・座談。

○十二月五日。午前十時より、六日午後まで。相生市。本願寺派法林寺。

○十二月十五日。姫路市。西源寺。午前・午後

（詳しくは念佛寺にお尋ね下さい）

# 安楽浄土をねがいつつ

(和讃問答)

安楽浄土をねがいつつ

他力の信をえぬひとは

仏智不思議をうたがいて

辺地懈慢にとまるなり

(浄土和讃)

現代語意識（弥陀の安楽浄土に生まれたいと願いつつ聞法しているのに、本願他力の信心をいただけない人は、仏智から現れた誓願不思議を疑うゆえに、辺地とか懈慢界とかいわれる方便化土に生まれてすぐに真実報土に入ることができない）

\* \* \*

D 「この和讃の趣旨は本願を疑うなら真実の浄土にすぐに生まれることができず、化土にとどまってしまふのだから本願を疑ってはいけない、と本願への疑いを誠めたもうご和讃です」  
N 「このご和讃についてい

ろいろおたずねしたいです。まず「安楽浄土を願いつつ」というのは」

D 「お浄土に生まれたいと願って聞法念仏しながらも、ということですよ」

N 「私はこの世を厭い死後に浄土に生まれたいというような気持ちは少ないのですが、これではだめでしょうか」

D 「死後に浄土に生まれたいという思いは少なくても、この世で真実にであいたい、触れたい、そしてそれを人生の拠り所としたい、という願いであれば、それがここで言われる安楽浄土を願うということになるでしょう」

N 「人生の真の拠り所を求めるとも浄土を願うことになるのですね」

D 「ええ、そうです。そういう心を宗教心といいますが、この世の財産も名誉も、政治も、道徳も、人間性も、

人間関係も一つも当てにならないとなつて、初めて壊れない変わらない確かな真実なり支えなりを求める、それを宗教心と言います。もう少し感性的に言えば、

この世の転変し移り変わる自分の内外の事象の中を生きて、なんとも言えないかなさとか悲哀感とかむなしさを感じる、この感覚にはすでに宗教心が動いているといえましょう。そして、

本当に確かな実りのある充実感がほしい、生きている確かな実感がほしいと自覚的に求め出すとそれは宗教を求めることになります。だから世界に太古の昔から宗教があるのです。これは決して趣味や道楽や文化の一部分ではありません。人生全体の根元にある課題にかかわることです」

N 「私は確かな人生の支えを見いだしたいと思って仏教、ことに真宗にであったのですが、いまだ信心がいただけません」

D 「真宗にであつても他力の信心がいただけないという問題にどうしてもぶつかりますね。この和讃では、

ともかくも安楽浄土を願う、いわば何とか助かりたい、真実にであいたいと願つて仏法を聞いていられるけれどもという問題ですね。そんな状態をここでは「安楽浄土をねがいつつ」と仰せになるのです」

N 「では他力の信心とは」

D 「本願を信じる心です」

N 「本願とは」

D 「アミダ仏が一切衆生を yourself の力によって助けようと誓つて働いてくださる大悲の願(力)のことです」

N 「では他力の信とは、アミダ仏の本願を信じることなのでですね」

D 「ええそうです。ただそれはアミダ仏という広大な働きがあつて、それを感得するとか悟るとか言うことではありません。アミダ仏の本願の「言葉」を信じる信心です。唯信仏語です」  
N 「言葉を信じる信心なの

ですね」

D 「ええそうです」

N 「本願をここでは仏智不思議といわれているのですが、なぜ本願を仏智不思議といわれるのですか」

D 「アミダの本願はアミダ仏のさとの領域から迷える衆生に働きかけ喚びかけたもう言葉です。アミダ仏の智慧はさとの智慧であつて、自と他、生と死を一如(一体)に見る智慧です。一方私たち迷いの凡夫は、自と他・生と死をわけ、自分を愛し他を憎み、生を愛し、死を憎むという迷い心を本質としている存在です。そういう迷いで苦しんでいる私たちに自他一如・生死一如の真実の領域いわゆる浄土ですね、その浄土に生まれさせて仏のさとりを成就せしめたいと働きかけ救おうとしてくださるのがアミダ仏です。そのアミダ仏のさとの智慧から出てきた救いの言葉が本願ですから、本願を仏智不思議といふのです」  
N 「なぜ不思議がついてい

D 「アミダ仏の本願は、自  
と他を分け生と死を分けて  
しか考えない迷い凡夫にと  
っては不思議としか言い様  
のないものです。それゆえ  
釈尊は（汝にとつて弥陀の  
本願は不可思議な本願だか  
ら、納得して助かろうとか  
知り分けて助かろうなどと  
思うなよ、ただ不思議とい  
ただいてくれよ」とのお勧  
めです」

N 「本願のみ言葉は私たち  
にとつて不可思議な言葉で  
あり、本願力は不可思議な  
働きなのです」

D 「ええですから、私たち  
がそれを聞いて理解し納得  
して、納得できたら受け入  
れようとかかると一生かか  
っても分かりません」

N 「不思議な、いわば分か  
らない本願を聞くとはどう  
いうことですか」

D 「分からないけど、本願  
のお助けはあまりにも有り  
難いので、理屈をはなれて  
受け入れざるを得ないので  
す。だから本願は仏智不思  
議は極まりのない不思議な  
慈悲（力）であって、この  
極まりのない大慈悲の前に  
は理屈をこえて感動せざる

得えないのです」

N 「自分の知性では分から  
ないけれどもあまりにも有  
り難い仰せですから、思わ  
ず（ありがとう、南無阿弥  
陀仏）と受け入れざるを得  
なくなるのです」

D 「ええまったくその通り  
です」

N 「受け入れたらどうなる  
のですか」

D 「不思議にもアミダ仏の  
お心が私の心に届いて離れ  
なくなり、アミダ仏に掴ま  
れてしまつて離れなくなつ  
ている自分を知るのです。  
それを摂取不捨の利益と申  
します」

N 「不可思議の弥陀の本願  
を疑う人は（辺地懈怠にと  
まるなり）とは？」

D 「本願を疑う人は死して  
後、真実の浄土には生まれ  
ずに、辺地とか懈怠界とい  
われる仮の浄土（化土）に  
生まれる（とどまる）のだ  
よ、と釈尊は仰せになるの  
です」

N 「仮の浄土とは」

D 「真実の浄土に生まれさ  
せるために更に仏法によつ  
て教育され、育てられる領

域であり、教化されて真実  
の浄土に生まれるべきお手  
立て（方便）としての浄土  
といわれています」

N 「では辺地とは？」

D 「真実の浄土そのもので  
はなく、浄土のかたほと  
りといわれています」

N 「懈怠界とは？」

D 「これは化土（仮土）の  
ことで『菩薩処胎経』には  
懈怠界と説かれているので  
す」

N 「辺地とか懈怠界という  
のは私の知恵では分かりま  
せんが」

D 「ええ、私も同じです。  
ただ仏説はまことと知らさ  
れていますので、仏様のお  
言葉をそのまま受け入れて  
います。分からなくても（あ  
あそういう領域があるのだ  
なあ）といただいておりま  
す」

N 「では（辺地懈怠にとま  
るなり）とは」

D 「本願を疑う人はすぐに  
真実の浄土に生まれず、化  
土に途中で止まつてしま  
い、すぐには真実の浄土に  
は至らないといわれます」

N 「このご和讃は全体的に

何を言おうとされるのでし  
ようか」

D 「それは本願を疑うと仮  
の浄土にとどまつてしまつ  
て真実の浄土に生まれない  
から、どうか本願を疑うこ  
となく不思議な本願を信じ  
てくれよ、との戒めとお勧  
めです」

N 「本願を疑う罪の深いこ  
と、それを知らしめいまし  
められるのです」

D 「ええそうです。弥陀の  
本願は全く不可思議な本願  
です。私たちはこの本願を  
聞きながら仏智を人知でさ  
ばき、人知で決着をつけよ  
うとしているのです」

N 「仏智に対して人知で納  
得して助かろうとするので  
すね」

D 「人知で納得して不思議  
な本願を受け取ろうとす  
る、それは人知を信頼して  
仏智を信頼しないという懦  
慢心があるのです。懦弱心  
があるので懈怠界に止まる  
といわれるのでしよう」

N 「人知を張り立てずに仏  
智不思議を信じるというの  
は？」

D 「仏智から出た本願のお  
言葉すなわち（そのまな

りで助ける）（引き受ける）  
という仰せをそのまま直受  
けにすることといえましょ  
う」

N 「（丸々引き受ける）と  
いうアミダ仏の大慈悲の仰せ  
をそのまま聞き受けるので  
すね。なかなか直受けにで  
きないです」

D 「自分の努力や計らいで  
はできません。（自分には  
ほかに道が無くなった）い  
わば（救い無き身）と知ら  
され、同時にそんなものに  
（我が名を称えるだけで何  
もいらない、そのままなり  
で助ける）との底抜けの  
大悲心を聞かされることに  
よつて、おのずから本願を  
受け入れるということが不  
思議にも起こるのです」

N 「そういうものですか」

D 「ええ、アミダ仏の大悲  
心は有り難いことに愚かな  
凡夫の心にもしみこんでく  
ださるのです。不思議と  
言うほかはありません」

（了）

